[サリュ]

フランス語で〈救い〉の意。

Salut

人が集まる。いのち弾ける。

シアトリカル

應典院

平成9年、スタート。

創刊のごあいさつ

文化のお寺應典院の再建は、なにわの名刹大蓮寺が創建440周年記念事業として着手するものです。大蓮寺は、多くの文人や教育家、また芸能家とも縁の深い、文教の寺院。應典院はその伝統を踏まえ、地域に開かれた、まったく新しい都市型寺院として平成9年に竣工します。

その構想は、劇場型の本堂を有し、あらゆる世代を対象としたさまざまな研修やイベントを開催、新しいこころのエネルギーを放つ、文化創造の拠点づくりといえます。もちろん劇場機能も装備し、演劇やアートなどの自主公演なども計画、まさに都市の異界として、多くの注目を集めることでしょう。そして、すべての根本に流れる大乗仏教のみ教え――大慈悲―救い、を、いまという時代に伝えるため、應典院は永劫に一心に精進を重ねる所存です。

本誌は、應典院の実現に向け、すでにスタートしている多くの教化・教育事業、またそれに加え同寺のプロデューサーとして活躍する秋田光彦住職の活躍ぶりをお伝えするものです。当面、夏と冬の年2回の刊行を予定しておりますので、どうか末永いご愛読をお願い申し上げます。

應典院再建委員会代表　秋田　光茂

文化のお寺〈應典院〉のニューズレター

1

1994●SUMMER●VOL.1

発行■應典院再建委員会
編集■サリュ編集部

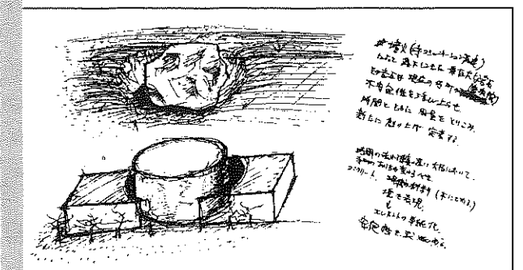
應典院　〒531　大阪市天王寺区下寺町1-1-30

TEL(06)771-0729　FAX(06)771-2461

THEATRICAL OTENIN:ARCHITECT REPORT

造家建築研究所の河裾くんに、仕事のこと、應典院のこと、など聞いてみた。

聞き手／編集部



新しい風景をつくる、お寺の磁力

はじめまして、造家建築研究所の河裾紳一です。今年春の新卒で、建築家の高口恭行先生の下で修行中です。学生の間は建築の勉強と、あと京都の北山でバーテンダーのバイトをしていました。

大学の建築学科を出ると、大手のゼネコンや設計事務所に就職というケースがよく見られますが、私は大学の恩師から高口先生をご紹介いただき、修行させていただこうと思ったのです。

初印象ですか。普通の会社と違って、トップである先生との距離がすごく近いな、と感じましたね。いっぱい刺激を受けて、勉強になります。應典院のこと、先生からお聞きした時、率直に「そんなん、あり？」と感じました。私のお寺のイメージとかけ離れていましたから。でも、いろいろ計画が進んでいくうちに、このプランがこれからの都市の寺院の新しい試金石となるんだな、ということも分かってきました。いまはたいへん興奮しながら、仕事させてもらっています。

よくうちの先生がおっしゃることに、「お寺はもっと目立たなあかん」と。その意味がだんだん理解できるようになってきました。お寺には周辺の商業建築とは全然違う哲学があります。はじめは違和感があったとしても、次第に周囲を巻き込んで新しい風景をつくっていく、お寺ならではの磁力があります。例えれば、火山が噴火し、大岩が落下する。やがてその周りに草が生え、花が咲き、新しい風景が作られていく。應典院の建築案は、これからの寺町に、そういった働きかけを可能にしていく形態を目指したものなのです。

自然光による、生きた荘厳浄土

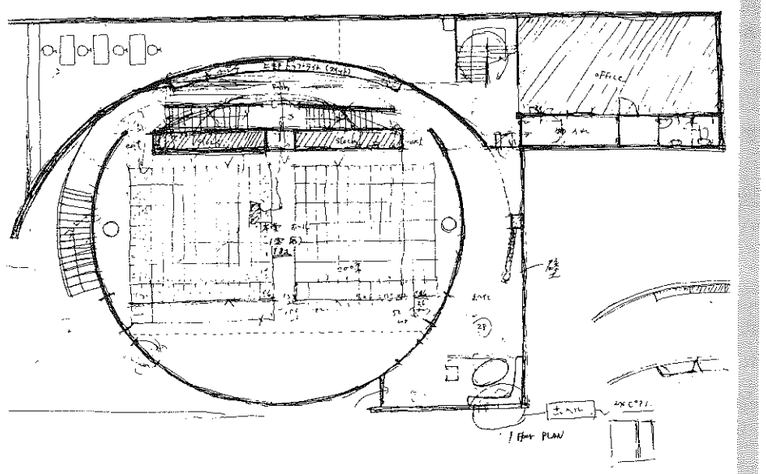
應典院はいまの都市を象徴する素材であるコンクリート建築で、本堂はコンクリートならではの曲線を活かし、円形ホールになっています。本堂へは切り立った壁の間を抜けてアプローチするという緊張感があります。

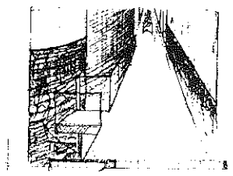
本堂は住職の意向により、充実したホール機能を装備します。研修会や講演会はもちろんですが、演劇や美術展、小さなコンサートもできるよう多機能に考えています。収容は椅子のタイプにもよりますが、大体180 人くらいでしょうか。面白いのは、本尊で、ここは仏像ではなくて、壁面一体に彫られたレリーフのような感じになります。その壁面に、自然光が差して、生きた荘厳浄土を描きだす、というのが意図です。

1・2階部分が吹き抜けでホールになっており、3階部分は應典院の寺務所や研修室、それとロビーがあります。ロビーは東に向かって大きく窓が開けてあり、ちょうど生魂の緑と大蓮寺の墓地が、大きなフレームで区切られ、まるで銀幕に映し出されたかのように見えることでしょう。

最近は秋田住職に、NGOの会合なんかにも誘ってもらったりして、視野を広げています。刺激を受けながら、だんだんと應典院のことを立体的に理解できるようになりたいと思います。

掲載の図版は私の描いたスケッチです。應典院の雰囲気を感じ取っていただければと思います。次回は、もう少しリアルなものをご紹介します。では、また。（談）





應典院というイメージの中で、ニュースなぼくが、回っている。

應典院住職　秋田光彦師に聞く。

いなかったんですが、どれも、表現は異なっても、基本的にはお寺に対して、愛情と期待のこもった好意的な意見なんですね。

「お寺は、都市の〈静〉や〈異〉の文化を受容する場所であってほしい」とか「小回りのきく関西のお寺だからこそ、もっと面白い仕掛けを」とか、従来の宗教施設から文化の拠点へ、いかにすれば変化していくか、そこの議論が一番白熱して、ぼくなんか、うなずくところ大で、本当にタメになりました。

ゲストのコメントは、ぼくの場合、当然應典院とオーバーラップしていたわけですが、都市の文化としての應典院のスタンスを、より明確に考えさせられたものでした。

円形ホールの本堂

さて、その應典院ですが、去る四月九日、應典院再建拡大委員会が大蓮寺において開催され、基本的な構想が協議されました。檀家や法類、さらに専門家などが十九名、一堂に会し、記念すべき第一歩を踏み出しました。

應典院は何をする寺なのか、そこのところをぼくの立場から存分にお話し申し上げ、それに呼応して建築の第一プランの提示となりました。高口恭行先生の應典院案は、外観は円筒で、内部は円型ドームの本堂という大胆なもの。委員さんからもおおむね好評で、今後細部について煮詰めを施していくことになりました。細部といっても、應典院は一般的なお寺機能とは、相当趣を異にしています。まず本堂＝ホールとしてどの程度の機能装備を持たせるか、その他の研修室や寺務所など、どのような設備を作るか、この寺の最も原則的なプランがこれから企案されていきます。

むろんぼく個人の描くイメージは、大まかにはあります。でも、それを誰もが納得できるような、普遍的なものに書き直す作業はまだこれからです。夢ばかりで、人材面や能力面、あるいはハード的な制約から叶わない場合もありましょう。その辺のすりあわせを、現実的に考えていくのが、まず第一段階だと思っています。

應典院へのさまざまな助走

これまでのお寺づくりですと、まず図面ありきで、建築という実態があって、計画が進んでいくのが常でした。でも、應典院という寺は、実態より、まずイメージなんです。同時に、それはぼくという人間のニュース性であったりするわけで、それらが積み上がって、やがて應典院の中心像を造っていく。ぼくがいまやってることの、大部分は、そういう周縁から中心を描くアプローチなんです。

ただ、ぼく自身も時々困ってしまうんですが、ぼくというニュースが、これまた多種多様でこれ一本という路線が定まらない。創教出版で請け負ってやってるものもあれば、蓮美もあるし、宗門としての動きもある。不遜に聞こえるかもしれないけど、無節操なことも含めて、これすべてぼくというオリジンについてのみ、相似形をとることができるんですね。



OSAKA寺町フォーラムで。MCの西尾由里さんと。

その意味で将来の應典院は、たぶんぼくのやっている大方のジャンルを、寺の活動として吸収していくだろうし、これらがその基礎活動だという言い方もできると思っています。ともかくも、秋田という個人を軸にして、應典院への助走がいろんな走路で始まっている、という風に認識してもらえれば、いい。

今度発刊する本誌「Salut」ですが、これは應典院再建の事業のひとつとして取り組まれるものです。一言でいえば、應典院の会報であり、PR誌であるわけですが、勝手ながら大蓮寺の檀家さん、パドマ幼稚園の保護者の方々、またぼくといろんなご縁をいただいている方々にも配布させていただきます。お寺からいえば、檀家さんも保護者のみなさんも同じ仲間になるわけで、大蓮寺同様、應典院とも、おつきあいいただきたい。たださっきも言ったように、應典院は、いままでのお寺とは顔つきも動作も違う。いままでの仏教とは、少しアプローチも異なります。でも、それはすべて「救いの実現」に向けての実験的な試みであって、その意味ではぜひとも應典院というお寺の発想と活動について、みなさんのご理解をいただきたい。應典院はそれ自体が一種の運動体なんです。ここで全部明かすことはできませんが、應典院のビジョンとみなさんの感性がぴったりふれあうことができれば、本当にうれしく思います。

人。めぐりあい。ネットワーク。

今号の誌面を見ていただいた通りですが、内容はぼくの近況のレポートが基本です。なんだ、自己PRかと言われてしまいそうですが、建物も資本もない現段階では、ぼくというニュースを軸にするしかないわけですからその辺は大目に見てください。

それにしても、毎日の人との遭遇はじつに面白い。出会った新しいシーンに対し、できるだけ関心を払いながら、つぎの場面づくりに努力していきたい、と思います。

ありがたいことに、仕事のいろんな側面で学者の先生方や現場の活動家やアーチストまで、本当に人との巡り合わせは、すごく恵まれたものがあります。ジャンルでいっても、仏教や幼児教育、生涯学習、最近は国際協力の方面でもたくさんの知己を得ました。縁が縁を呼び、次の縁を引っ張りだしていく。まさに人間のネットワークが應典院を軸にぐんぐん広がっていく感じです。「Salut」が、そういう広がりの媒体になれば、本望です。

気の早い話ですが、来る十月二十六日に、應典院のファンクラブを発足させます。街のアーチストやボランティアの人たちなど集まってそれぞれのイメージする應典院を語り合おうという趣旨です。應典院の基本プランや建築のデザイン案も発表しますので、お暇があればぜひ参加してください。

ともかくも以上應典院のラフなお話まで。

「Salut」共々、何卒よろしくお願いします。

合掌

TALK & TALK

さまよう現代教育像のかなたに 寺子屋のイメージが見えてきた

東大助教授　汐見稔幸先生と語る2時間

六月十九日、父の日。近鉄西大寺駅近くの会場に汐見稔幸先生を迎え、フリートーク形式で語っていただく会が催されました。

汐見先生は東京大学教育学部助教授。その研究は幼児教育を中心に教育論全般に及びます。なかでも先生のメインテーマは、家庭における教育のあり方です。家族関係論や「親の役割」論として語られる汐見先生の家族教育学は、日本人の家庭回帰志向が強まるなか、家族関係回復の一指針として、学界の枠を越えた広範な人々の注目を集めています。

フリートークということですから、最初からこれと定まった演題があったわけではありません。ナビゲーター（水先案内人）の導きにしたがって、汐見教育学が今日はどんな展開を見せるのか。それもフリートーク形式ならではの楽しみです。

さて、ナビゲーター役は應典院住職の秋田光彦師。「今日はおりしも父の日でした」と切り出します。午前中、次女の通う幼稚園で父親参観があって、ステージ上の百人近い子供たちの中にいるわが子を遠巻きに眺める、そのことに心地良さを覚えたといいます。客観的にわが子の成長を見守ること。そこにある種の父親「らしさ」を実感したというのです。世の中の父親たちは、子供に対するどのような関わり方の中に、「らしさ」を実感しているのでしょうか。

汐見先生はこれに答えるかたちで、保健所の「両親学級」講師の経験を通して感じた、父親の子に対する関わり方の変化について、次のように語ります。「変化は、バブルの時期を境にして生じてきました。バブル華やかなりしころ、保健所の『両親学級』は各所で閉鎖の危機にさらされ、一方で育児雑誌の売れ行きが急激に伸びたです。育児にマニュアルを求め、親が子育ての『合理化』をはかった時期、といえるかもしれません。ところがバブルが翳りをみせるとともに、再び『両親学級』への申し込みが殺到しはじめました。しかも以前は母親が中心だったのに、父親の申し込みが急増しているのです。儲け追求の仕事志向に代わって家庭に生き甲斐を求める家庭志向が顕著になり、父親も、母親任せマニュアル任せの父であることをやめて、自ら父親らしさを実感できる父親になろうとしています。それが『両親学級』の再盛況にあらわれているのです」。

幼児をおぶって街を歩く父親の姿が珍しくなくなったように、男が子供をおんぶできるものかといった古いモデルにこだわる父親は少なくなってきました。とはいえ、新しいモデルは完成された一定の父親像がないため、多様な「らしさ」が想定される一方、モデルの不在にとまどう父親が多いのも実状です。

では、昔ながらの父親像はなくなってしまったのでしょうか。……と、秋田師が問いかけます。統計によれば、父親の自己評価として「①趣味に生きる　②社会のために　③家庭で仲良く　④仕事一筋」の内、③が圧倒的な割合を占めています。また、ボランティアに参加するなど「良き市民」として生きようとする父親も多くなっています。かつて日本の父親の典型とされた④の割合は急減しています。穏やかさ・楽しさ・善良さといった価値が優位を占め、厳しさ・大変さといった価値が後退しつつあるようにみえます。



汐見稔幸先生

父の哀しさ

それに対して汐見先生は、「父の哀しさ」という言い方で、次のような話をされます。仕事を家に持ち帰って子供に憂鬱な顔を見せたりはできず、穏やかに泰然として子供に接しなければならない哀しさ……。「仕事一筋型の価値が減退しつつあるなか、なお実際には仕事が大きな比重を占める父親たちは、自分を取り巻く『厳しさ』をせめて家庭には持ち込むまいと努めるようになってきたのでしょうか」。そう考えると、確かに哀しく消極的なあり方のように思われます。しかし汐見先生は、じつはこれこそが父のあり方というものなのかもしれない、と言います。穏やかな顔をして「つらさ」はあまりおもてに出さず、世を生きていくことは祝福されたことなのだと、子供に伝えていく役割。内心では何かと動揺していても、泰然として、「動揺するな、堂々と生きていきなさい」ということを子供に伝える役割。実際には、とりあえず波風立てぬように穏やかにふるまっている、という父親が案外多いのかもしれません。汐見先生の言葉は、そういう父親たちへ送るエールのようにも思われました。

とはいえ……そんなふうに期せずして得られた役割に満足しているわけにもいかないようです。汐見先生は次のようなデータをあげて続けます。子供たちに「尊敬する人は？」という質問をしたところ、一位「いない」、二位「父」という結果が出たというのです。ふむ、父親も捨てたもんじゃない、と思うのは大きな間違い。堂々二位となった父親ですが、大半は「家族を養ってくれる」という理由で「尊敬」されているにすぎないのです。裏を返せば、子供にとっては身近に人生のモデルがいない生きにくい現状に変わりはありません。そもそも具体的な進路選択の基準となるのは、身近にその仕事をしているすごい人がいて尊敬しているといったことで、それ以外はたいてい抽象的です。もちろん、「すごい人」が父親でなければならないとは限りませんが、子供にとって最も身近な「すごい人」になれる可能性を持っているはずだし、少なくとも社会的存在である父親は、子供と「すごい人」の架橋になる機会も多いはずです。汐見先生は力説します。「したがって父親は、仕事している姿を示すことをも含め、ともあれ具体的に生を営み人と関わり合うさまざまな姿、それを子供に示す役割を担っているのです」と。

子どもらしさ、とは

これを受けて秋田師が、一つのエピソードを紹介します。秋田師の友人に、石ころに絵を描く画家がいて、その人のアトリエを長男とともに訪ねた時のことです。芸術家の不思議な空間をはじめて目にした長男が、父親の秋田師に向かって突然こう言ったというのです。「お父さん、かわった友だちおるな。尊敬するわ」。かわった人その人よりも、かわった人を友だちに持つ父親を「尊敬」するという長男。秋田師は、息子から直接「尊敬」という言葉を受けたのはこれがはじめてだったといいます。父親の多様性の一側面を子供に見せていくことの大切さを、この時の秋田師は痛感したといいます。

多様性という言葉が出てきたところで秋田師は、「今の時代の子供らしさって何でしょう」と話を少し別な方向へナビゲートします。多様性の反対語である画一性が子供たちを縛り、かつてあった「子供らしさ」が失われつつあるのではないか。……例えば、子供らしさの象徴的な遊びであった泥んこ遊びが都会ではほとんど見られなくなり、見られるとしてもそれは公園の砂場といった「契約された場所」に限られる。そんな状況下、はたして何が「子供らしさ」なのでしょうか。

汐見先生によると、「子供らしさ」とは次のようなものです。子供はごくシンプルに完全なものと不完全なものとを分け、常に完全に憧れるというのです。例えば団子を作っていたとしましょう。どうしてもまん丸な団子ができず、いびつな団子になってしまう。大人ならそこで、多少のいびつさは許容してしまいがちです。しかし子供は絶対に許容しない。いびつ（不完全）な団子を何度でも壊して、まん丸（完全）ができるまで繰り返し作り続ける。ところが、完全と不完全を画然と

区別しながらも、子供はその間を自由に往来する才能も持っています。完全＝聖なるもの、不完全＝俗なるもの。聖と俗との間を自由に行き来し、俗の世界の嫌なことを聖なる希望に変えることができる、そこに「子供らしさ」があります。泥んこ遊びの例でいうと、ちょっとした汚れ（俗）さえ嫌がる気持ちはやがて全身泥だらけ（聖）の快感に昇華するのです。こんな経験は、誰しも古い記憶をたどれば一つ二つ思い出されるでしょう。

「平等」カテゴリーの再構築

汐見先生の話からは、遊びの形態が変わってもそれが即「子供らしさ」の喪失につながるものではない、との理解が得られました。ただし、何々は俗即ち悪、何々は聖即ち善、と物事の価値を身動きできないほどに固定し、すべての子供に画一的な対応を強いる装置が大人から子供へと与えられ続けてきた事実を見逃すことはできないようです。その装置には、与えられた「遊び」の装置もあり、「教育」という装置もあるのです。

汐見先生のフリートークは、いよいよ現代教育機関論へと進んでいきます。

学校はそもそも、と汐見先生は語ります。「そもそも『不平等を少なくする装置』として学校は設置されました」。言い換えれば「平等を強いる装置」、先の表現に即して言うなら「画一的な対応を強いる装置」として、明治以降の学校教育は発想されたということになります。訓示される道徳観の内容にもそれは顕われていたでしょうし、何より教育方針それ自体が「成績の均一化」をテーマにしてきたのです。しかし実際には不平等が助長された、と汐見先生は言います。強いられた「平等」は幻想にすぎませんでした。表面的な均一化は子供たちの個性を圧迫し、その上なおかつ均一たりえなかった者に敗北者・落伍者の烙印を押すという決定的矛盾を生んだのです。平等など幻想とおそらくは分かっていながらも、それを認めることのできない学校は、現実的な「不平等」の確保を他者、すなわち塾や予備校といった他の機関に委ねた、といえるのではないでしょうか。

「今必要なことは、平等というカテゴリーを考え直すこと、つまり『成績の均一化』イコール平等という考え方を抜け出し、それぞれに違う者同士が対等に存在し合えるという意味での『平等』カテゴリーを再構築すること、そしてそのためにも、家庭教育と地域教育によって平等を回復していくみちを探ること」と、汐見先生は言います。

寺子屋の可能性

江戸時代の初等教育機関は寺子屋でした。まさにそれは地域教育の現場でした。信頼できる人に子を預けるという意識が、現在の学校に対するよりもいっそう確固たるものだった点を考えれば、家庭との連帯感も現在よりはるかに強かったのではないでしょうか。一方、教育内容も今日の学校におけるほど画一的ではなく、例えば商人の子弟には「商業往来」、農民の子弟には「農業往来」といったように、教科書も子供に応じて各人各様に与えられていたといいます。「成績の均一化」といった発想も、寺子屋の教育にはほとんど見られなかったものと思われます。年齢も程度も違う子弟が一つ所に集まって勉強するので、学年別・学力別の編成なども基本的にはなかったわけです。それが明治以降、国家による「学校」の押し付けで大集団化と編成化が進み、寺子屋的教育は失われていくことになります。汐見先生は、この寺子屋に教育機関としての可能性を感じておられるようです。「寺子屋をもう少しシステム化したようなものを『学校』として再構成していくなかで、『不平等の助長』は正されていくのではないでしょうか」と語ります。



さて、フリートーク形式ならではの軽いフットワークで、話題がさまざまに転調していった二時間余、さまざまな話題の底に一貫して流れていた「思い」が、全体の印象として残っています。汐見先生の一貫した「思い」……それを少し固い言葉で表現するなら、父親の役割にしても学校の役割にしても、子供に何らかの価値観を上意下達式に与える役割といった考え方はもはや克服されねばならず、今日では父親も学校も、子供が自分自身固有の価値観を発見する、その導きをするということを、自らの役割としてとらえ直さなければならない、ということではないでしょうか。

應典院のイメージ

「教育」とは、個性の芽を摘む作業であってはならず、個性を開花させる作業であるべきです。そのための教育機関のモデルとして寺子屋がある。……この汐見先生の発言に、ナビゲーターの秋田師のほうが図らずもナビゲートされてしまった、とするのは第三者のうがった見方にすぎないでしょうか。僧侶としての秋田師には、寺院を地域のコミュニティースペースとして位置づけたいとの願いを抱く秋田師が、汐見先生の語る「寺子屋」を確固たる援護射撃と受け取らないはずはありません。「寺子屋」というキーワードが、應典院のイメージを、いっそう豊かなものにしたであろうことは想像に難くありません。

教育学者と僧侶とが共有する「思い」、それをまた他の参加者が共有していくなかで、それぞれが教育現場へ、あるいは家庭へと持ち帰る課題をしっかりとつかむことのできたひとときではなかったでしょうか。

雨上がりの「父の日」の午後、閉会後もなお人々が足を留める会場の窓からは、にじむ西日にやんわりと照らされて、平城京趾の緑をはるかに望むことができます。

（取材・文／わたなべ　たけし／作家）

連載・宗教乞食のモノローグ（1）

一切苦行。悩んでこそ。

中谷　加代

もう何年も前から、仏様の教えを学びたいと願っていたら、この四月、浄土学を学ばせていただけることになった。「参考書を読んでレポートを書きなさい」とのことで、「自己の仏心について」というテーマをいただいた。

まだ不十分な学習で、自己の仏心など見えてこないのだが、この三ヵ月の間には、以前から疑問にしてきたことのいくつかの答えが得られて、そのたびに学習の喜びを味わっている。私のカウンセリングの師、黒橋条一先生は「フロイトもユングも東洋の思想を知っていたのだろう」と言っておられた。ユングが彼の内面的危機の時代に中国思想に関心を持ったのは有名な話であるが、フロイトと東洋思想の関係は、今までよくわからずにいた。先日、アーラヤ識の作用を知って、フロイト先生は「原罪の存在」だからと強調されるのか、「仏教入門」の著者、藤井正治は言う。「元来、宗教というものは、現実の悩み・苦しみを脱して、無苦安穏の理想の境地を得させるためのものです。従って、もし現実に満足し、何の苦悩や不満を感じないならば、何も宗教を求める必要はありません」「つまり一切苦行は仏教の出発点であり、――」と。アア、ソーナンダ！この世が一切苦行と思えない人は信仰しないんだ。原罪を認めなければアーメンと言う必要もない。人々に「救われたい！」「救って下さる！」という認識を、より大きく意識化させるには、苦の強調、罪の自覚を初めに言う必要があったのだ。

私のように仏教もキリスト教も、あれもこれも「すばらしい」と思い、信心はあっても一つの教団には入り込めない者には、どうも苦の自覚や罪の意識が鈍いのかもしれない。いや、苦の自覚や罪の意識は十分なのだが、のがれたいと感じる心が少ないのかもしれない。すぐに、「苦労の過ぎ去るのを待つしかない」とか「あやまるしかない」などと思ってしまう。「許されないまま地獄に落ちるもしゃあないか」なんて…。

諦めいいのか、自虐的なのか。超党派の信仰者の私は、友人から「宗教乞食」と言われながら、今、仏教の学習を楽しんでいる。

（なかたに　かよ／カウンセラー）

子どもの権利って何？

子どもの権利の三本柱

第４回ロータスカルチャーサロンは５月20日、サンガホールに、南ア出身で大阪在住の詩人トーマス・Ｃ・カンサさん、「国際子ども権利センター」の栗本敦子さんのお二人を迎え、子どもの権利について語っていただきました。

10年後には15歳以下が世界人口の半数になるといわれるなか、各地で子どもの権利侵害が深刻化しています。貧困、飢餓、不当労働や売春の強要、幼児虐待……。あらゆる子どもたちの権利を守るのは地球規模の課題であり、それには国際協調が必要、との精神に基づき、「子どもの権利条約」は1989年に国連で採択、翌年発効しました。150か国が批准し、日本も今年４月に批准の手続きを済ませました。この権利条約をめぐって、まず栗本さんから基調報告がありました。

子どもの権利の三本柱は「①賦与権＝生きるために与えられた権利」「②保護権＝苛酷な状況から保護される権利」「③参加権＝意見を言い参加する権利」です。①は、飢餓や不衛生が蔓延する発展途上国でとくに回復が急がれる基本的生存権。②は、少年兵、ストリートチルドレン、児童の不当労働・売春など劣悪な状況から守られる権利です。

意見表明権はあるか

そして③の「参加の権利」を考える上で、栗本さんは、表面上権利を侵害されているようには見えない日本の子どもたちに目を向けます。じつは日本の条約批准が遅れたのは、子どもの権利侵害をアフリカなど《遠い国の悲惨》と考え、《内なる悲惨》に無関心だったからでは、と栗本さんは言います。「私は幸せな高校生活を送っているのでアジアの貧しい国に目を向けたい」などと言う女子高生がいるそうです。自分を幸せと言い切ることができるなんて……。しかし実際はどうでしょう。日本の子どもたちは管理教育の下で参加の権利、とりわけ意見表明権を侵害されてはいないでしょうか。逆に、例えば不登校児は、教育の拒絶というかたちで意見表明権を行使しているのです。日本の子どもたちの「権利」だってもっと保障されなければならない、と栗本さんは語ります。

わが子から世界の子どもへ

次いで司会の義野理恵さんをはさんで、トーマスさんと栗本さんのトークセッション。トーマスさんは南アの子どもたちの描画治療（おもに心を病んだ子どもたちに絵を描かせ、心を解放する）のために、故国にクレヨンを送る運動をしていますが、そんなトーマスさんの目に映る日本の子どもたちは、主張を奪われ枠にはめられたロボットのようだといいます。よく日本の親は子どもに「普通の人になれ」と言いますが、個性を削りとって均一にし、子どもが世間並みの没個性に落ち着くのをよしとする感覚を、トーマスさんは理解できないと言います。栗本さんも、日本の子どもは学校や大人が定めたルールの上を疑いなく生きていると指摘し、自身このルールの上を走り始めていることに疑いを抱くようになってから、ようやく自分らしい生きざまに目覚めたと言明します。

一定の価値観を押し付けられ、意見表明権を封じ込められ……。日本の子どもは「参加の権利＝意見表明権」を侵害されています。それも親や学校によって。親とは本来、意見表明しようとする子どもを支持し守り、あるいは反対するにしても世間の道理のようなもので説き伏せようとするのではなく、あくまで自分自身の意見として反対する、そういう立場にあるべきではないでしょうか。

また、お子さんを日本の学校に通わせているトーマスさんは、よく学校を訪ねるといいます。うちの子がひどいめにったから抗議しに……？　管理責任を追及する時だけ乗り込むというのは結局、管理の良否のみ問題にした態度です。トーマスさんが学校を訪ねるのはそうではなく、わが子を個性豊かに育んでくれるはずの「学校」で、先生や子どもたちといろんな対話をしたいからなのです。

子どもを自分の所有物と勘違いしている間は、子どもに対する権利侵害は止むことがない。わが子に限らず世界じゅうの子どもたちを、一つ一つの個性として捉えていく姿勢、それが「子どもの権利条約」の精神につながっていくのだと、お二人の語らいを聞くなかで痛感させられました。

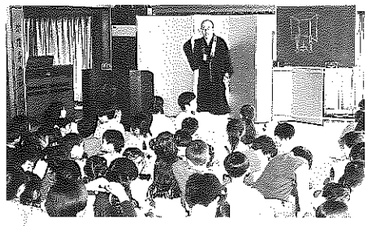
（写真左から栗本さん、トーマスさん、義野さん）



「われは仏の子なり」三帰会の子ども信行道場

大江組の三帰会による「子ども信行道場」が４月５日、大蓮寺で開催。７１名の小中学生が参加し、お寺は終日賑やかな雰囲気に包まれました。

仏教の「三法（仏・法・僧）に帰す」



から名づけられた三帰会は、浄土宗大江組（下寺町の浄土宗寺院の連合体）の若手僧侶を中心に、地域に根ざした教化活動を目的とする会。年に１回の教化事業や定期的に会合を持つ他、近日機関紙の発行も予定されています。

当日は秋田師が司会進行をつとめ、浄土宗大阪教区布教師会会長の柴田尚弘上人の講話や写仏など、子どもたちにとって「お寺で学ぶ」という、普段、学校や家庭では体験できない１日となりました。

杉山由美子さんの講演会

７月５日、パドマ幼稚園主催の母親教室と第４回全幼連全国研究大会にジャーナリストの杉山由美子さんをお招きしました。

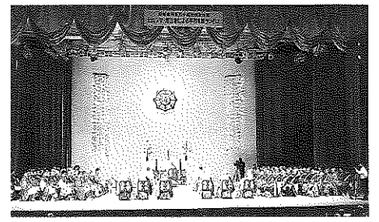
杉山さんとの出会いは、秋田師が汐見稔幸先生の著書の中で紹介された杉山さんの本「お子様おけいこごと事情」を読んだことがきっかけ。幼児の早期教育をただ一方的に批判するのではなく、なによりも子どもたちが学びたがっているという実情に即した幼児教育論に多くの教示を得ました。

とくに全幼連の記念講演では、「ニッポン幼児教室事情～ジャーナリストが見たいまどきの母と子」と題して、豊富な取材をもとに、これから望まれる幼児教室像についてわかりやすくお話しいただきました。

原爆犠牲者５０回忌慰霊法要 -念仏者による平和を願う集い-

６月８日、浄土宗広島教区主催の「原爆犠牲者50回忌慰霊法要－ヒロシマ　念仏者による平和を願う集い」が、二千名の僧侶、檀信徒が参集のもと、浄土門主・総本山知恩院門跡中村康隆猊下を迎え、広島国際会議場にて開催されました。

第１部の慰霊法要、第２部の成田有恒宗務総長の講演に引き続き、第３部では創作舞台「ヒロシマ　ＮＥＭＢＵＴＳＵ　’９４」が上演されました。この舞台は秋田師が総合プロデュースしたもので、原爆で弟を亡くした老婆が臨終を迎え、やがて浄土で家族と再会するというもの。なかでも、声楽家藤原薫氏の歌う「おとうと」は多くの人々の涙を誘いました。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ぼくたちの寺町について語ろう

ＯＳＡＫＡ寺町フォーラム開催

文化のお寺、應典院が試行する様々な教化事業とそのコンセプトを考えていく上で、大きな意味を持つことになったのが「ＯＳＡＫＡ寺町フォーラム」です。

大阪が国際都市として急速に変貌を遂げる中、長い歴史を培ってきた「寺町」がどのような役割を果たしていくのか。應典院の復興を目の前にして秋田師が企画を担当、佛教大学同窓会大阪支部主催で、大阪市、大阪21世紀協会、大阪商工会議所に後援をいただいたこのイベントは７月６日、オープンしたばかりの一心寺シアターにて開催されました。

当日は秋田師が司会進行をつとめ、一心寺住職高口恭行師のレクチャーに始まり、桂雀三郎さんの落語、各界著名な４人の先生方によるトークセッションなど、盛りだくさんの内容となりました。

開催前から新聞に取り上げられるなど、予想を上回る380 通の参加申込みをいただき、人々の「寺町」に寄せる関心の大きさを知りました。

また終了後も、参加者の方々から多くのご意見を頂戴し、「寺町」、そして應典院の未来を考えていく上で大きな契機となりました。



WIND FROM AYUS（1）

もっと知りたい、世界のこと。仏教のNGO《アーユス》ここにあり

小泉　登



お寺はしっかりしなはれ

去る七月二十五日、創教出版会議室を会場に、アーユス＝仏教国際協力ネットワークの第一回大阪スタッフ・ミーティングが開催されました。

会議の出席者は九名。連日の猛暑と天神祭の熱気が冷めやらない当日でしたが、スタッフ・ミーティングの方でも熱い（？）討論が展開されました。

午後六時四十分開会。初めにアーユスの理事を務める應典院住職秋田光彦師が、これまでの経緯にふれ、アーユスが、仏教の僧侶が宗派を超えて、国際協力に取り組むボランティアの運動体であることを説明（ちなみに「アーユス」とはサンスクリット語で「いのち」を意味します）。

続いて出席者の自己紹介に移りました。僧侶の方はもちろん、すでにNGO（非政府団体）での国際協力や海外で広範囲にわたって活動に取り組まれている方、経験はなくともボランティアに強い関心を持っておられる方など様々。けれども、お話しを聞くにつけ、それぞれの方がこの場所に集まったのは偶然ではない、そんな気がしました。

初めの議題は「アーユス大阪の運営について」。ここでは運営母体となる仏教、あるいは仏教者（僧侶）に焦点があてられました。

「海外で仏教者のボランティアを見ない」「キリスト教はイメージがはっきりしているが、仏教は宗派の違いが気になる」「日頃、仏教との接点が少ない」などなど、お寺に対する辛口の意見が続々。

しかし一方で、「市民対象のNGOなら他にいくらでもある。何よりもお寺対象の活動が前提」「仏教という立場を明確にした方がよい」などの意見に皆が賛同。先のお寺への期待」と受け取らせていただきました。つまり、「お寺はしっかりしろ！」「お寺はこびるな！」という叱咤激励では…そんな風に感じました。

一九九五年二月、ベトナムへ

次に「ベトナム・スタディツアー」。アーユスでは、来年の二月に「変わりゆくベトナム」と題してスタディツァーを企画、参加者を募集しています。大阪でもこのツァーを主催すべく、十人以上の参加を目指していきます。これを実現するために、学習会を積み重ねて、十一月初旬にアーユス大阪主催でイベントを開催することが提案されました。その内容や、参加の呼びかけ方については、次回（八月二十四日）に話し合います。

併せて、機関紙の発行も急務となり、ここではスタディツアーの呼びかけは元より、活動報告、会員情報などを掲載していく予定です（これも次回の議題）。

また、アーユス大阪の代表に全員一致で秋田師を選出、副会長には服部隆志師（自敬寺住職）、顧問格として、とよなか国際交流協会の雨森孝悦氏、龍谷大講師の斎藤千宏氏にそれぞれ就任していただくことになりました。

午後九時、ミーティング終了。この後、缶ビールを飲みながら楽しく語らい、和やかな雰囲気の内に閉会しました。

（こいずみ　のぼる／大蓮寺職員）

●

あなたもベトナムイベントにかかわってみませんか。

お問い合わせは、アーユス大阪まで。

☎06-771-0739（小泉）

●

EVENT INFORMATION

第5回・LCS 中田武仁さん講演会



来たる９月30日（金）、蓮美文化研究所が主催する第５回ロータスカルチャーサロンに、国連ボランティア名誉大使の中田武仁氏をお招きし、ご講演いただきます。

中田氏は大蓮寺の檀信徒。昨年４月に国連ボランティアとしてカンボジアで選挙監視活動中、銃弾に倒れたご愛息・中田厚仁さん（当時25才）をたたえる顕彰碑が墓域西入口そばに建っています。

このように大蓮寺と深くご縁のある中田氏に、父と子どもの深い結びつきについて、幼児を持つ若い父親を対象にお話しいただく予定です。

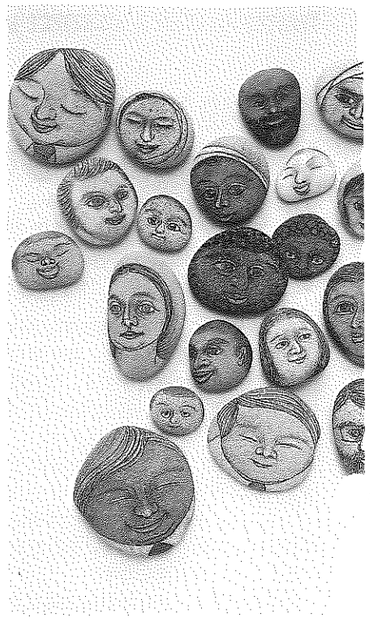
日時　９月30日（金）午後6:30～8:30
会場　さんがホール
参加　無料
問い合わせ　06-771-7641

永田与美さんの石ころアート

最近の創教出版の仕事は、去る７月16日、ＡＴＣで行われた、大阪青年会議所のイベント宣材づくり。ポスターは、近鉄や京阪などの駅貼りも実施されました。

このポスターに抜擢したのが、神戸在住の永田与美さんのストーン・アート。永田さんは、もともと染色作家として出発、イタリア・ボローニャで個展を開くなど活躍されていましたが、ある日「酔い覚めの海岸で見た石ころが、何か描いてくれ、といっているようで」、啓示的にストーン・アートを開始、アメリカ・ウェザーヒル社から作品集を出版されるなど、独自の作風で知られる作家です。

神戸はもちろん各地の幼稚園や小学校・図書館などで、親子対象の石ころアート教室を開くなど、普及活動にも精力的で、近々に蓮の子劇場（第２土曜に開催のお寺ライブシアター）にも御来演いただく計画です。



文化のお寺應典院を考える会、発会イベント

トークコンサート ぼくたちのお寺 應典院を語ろう。

大阪の文化拠点の創造という視点に立ち、新しい都市寺院の在り方を試行する文化のお寺應典院の着工まであと３年。この應典院の再建計画を広くグローバルに考えていくために、檀信徒のみなさん、とりわけ若い世代の方々にモニターとして自由に発言していただく場が、今回の「文化のお寺應典院を考える会トークコンサート」です。

当日は秋田光彦應典院住職の幅広い人脈から、音楽や演劇、国際協力、カウンセリングといった様々な分野で活躍されている方々をお招きし、應典院の可能性を立体的に語っていただきます。

また、産経新聞社会部記者の岡崎秀俊氏をお招きし、ジャーナリストの立場から大阪の文化シーンについてお話しいただく予定です。ぜひともご参加いただきますようお願い申し上げます。

日　時　平成６年10月26日（水）
　　午後６時
会　場　大蓮寺　客殿
主　催　應典院再建委員会

内　容　講演「文化首都・大阪の21世紀」（仮題）
　　産経新聞社会部記者　岡崎秀俊さん

座談会「ぼくたちのお寺應典院を語ろう」
　　カウンセラー　中谷　加代さん
　　音楽事務所代表　稲本　直さん
　　劇団座長　仁王門大五郎さん
　　国際子ども権利センター　栗本　敦子さん
　　聞き手　有田亜季子さん
　　（維新派）